

加茂郡八百津町採集の石器類

Introduction to Stone-tools Collected at Yaotsu-town Kamo-district

長屋幸二¹

Koji Nagaya¹

¹岐阜県博物館

要 旨

ナイフ形石器文化終末期, 東海西部地域では鋸歯状の刃部を有する特徴的なスクレイパーが見られる。当館に収蔵されている八百津町越水遺跡採集の資料にも同様のスクレイパーがある。県内では希少な旧石器時代資料というだけでなく, 時代を限定できる示準化石的な扱いも可能な資料である。

また, 当館蔵の八百津町野上採集の下呂石石核は質量790gと大型であり, 寄贈時には礫器として登録されていた。礫器とみなされた背景には, 昭和50年代のパラダイムがあったことがうかがわれる。八百津町内で採集されたこれらの石器について紹介する。

はじめに

当館が収蔵する考古資料は, 個人による地表面採集品などが主であり, その多くは未報告である。こうした館蔵資料を研究活動の俎上に載せるため, 順次観察, 図化し, 資料紹介を行っている。今回は, 加茂郡八百津町越水遺跡, 同町野上で採集された石器について紹介する。

1. 越水遺跡について

越水遺跡は, 加茂郡八百津町久田見野黒に所在する(第1図)。八百津町久田見は老年期の高原地帯で, 木曾川河岸の段丘面とは400mほどの比高差がある。

越水遺跡は久田見高原の南部, 南向きの緩斜面に位置する。昭和37年以降の調査で, ナイフ形石器や彫刻器, スクレイパー, 有舌尖頭器, 石鏃など旧石器時代から縄文時代草創期, 縄文時代早期におよぶ数百点の石器・土器片が採集されている(八百津町1976)。

ナイフ形石器は石刃や不定型な縦長剥片の二側縁に調整を加えた小形で切出形を呈し, ナイフ形石器文化の終末期に位置付けられる。他時期のナイフ形石器は見られず, 旧石器時代の資料としては比較的まとまりの良い石器群である。当該期に位置づけられるナイフ形石器以外の石器としては, 厚手の剥片に槌状剥離を施したのみのシンプルな形態の彫刻器や, 厚手の縦長剥片の端部に丁寧な調整を施して刃部を弧状に整えた拇指状搔器などが報告されている。

2. 越水遺跡採集の館蔵資料について

館に収蔵されている資料は, 昭和57年5月に, 当時の考古担当学芸員徳松正広によって採集されたものである。スクレイパー2点, 楔形石器1点, 打面再生剥片1点, 大小の不定型な剥片46点の計50点からなる。下呂石3点, ホルンフェルス2点, 安山岩1点, 44点がチャート岩で, チャート岩が卓越する。

スクレイパー (第3図1・2)

1はチャート岩製のスクレイパーである。光沢ある暗青灰色の緻密な石材であるが, クリーム色のやや軟質な部分が縞状に入る。厚手の石刃を素材に, 両側縁に急角度の調整で刃部を作出している。

背面右下には下方からの剥離面が見え, 両設打面により作出された石刃のようである。バルブは大きく膨らむが, 打面は薄かったことが側面形から想定でき, 熟練した技術により作出されたことがうかがえる。右側縁と打面部は, 大きく厚い調整を適当な間隔をもって施すことにより凸部が鋭く尖る鋸歯状に仕上げている。左側縁は中位に厚めの調整を数枚施してノッチを一箇所成形しているが, それ以外は薄めの調整を密に施し, 凸部は尖らせない。端部は2回以上の折断行為により除去され, その折断面から背面稜部に2枚の平坦剥離が深く施されている。これら端部の加工が装着するために厚さなどを調整する目的であるなら, 石器を挟み込むかはめ込む形状

あったようである。長さ28mm、幅14mm、厚さ6mm、質量2g。

楔形石器 (第3図3)

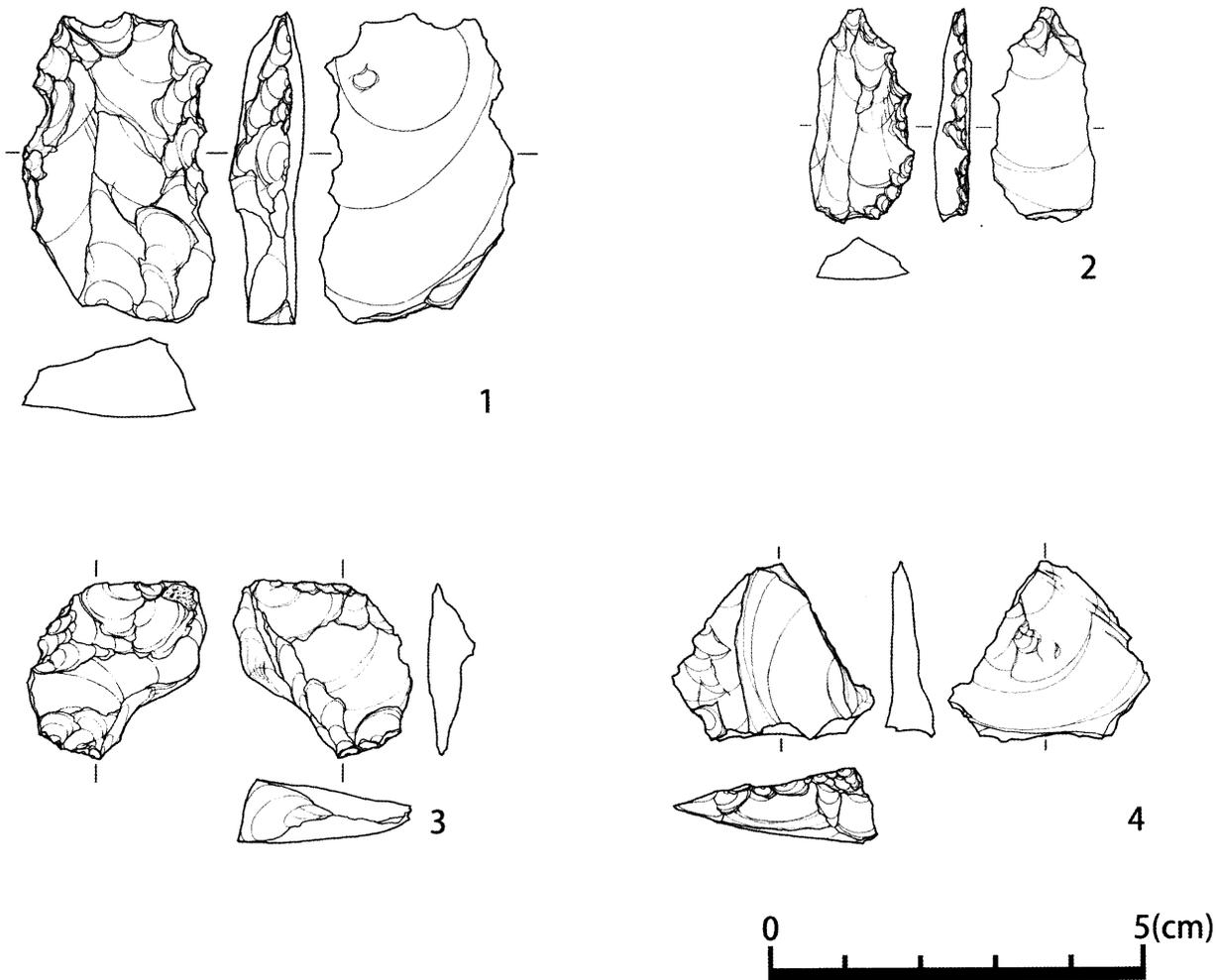
3は下呂石製の楔形石器である。風化は浅く、表面右上部に残る礫面が平滑であることから、下呂石露頭近隣で採取された礫から作出された剥片を素材にしたものと考えられる。右側縁は下端からの加撃によるスポールで大きく欠損しているが、背腹面(表面下半の大きな剥離面が素材背面で、裏面中央の大きな剥離面が素材腹面)のリングの方向が異なっており、ランダムな剥離による不定型な剥片が素材であったと考えられる。上下両端とも鋭いエッジとなっており、表裏に大小の平坦な剥離が入る。表面左側縁には潰れ状の小剥離が密に見られ、この縁辺も楔の作用部として用いられていたようであるが、上からの剥離に切られる。所属時期は、旧石器時代とは限らない。長さ24mm、幅18mm、厚さ8mm、質量4g。

打面再生剥片 (第3図4)

赤色のチャート岩製。2枚の剥離面からなる平坦な打面から、寸詰まりの剥片を作出しているが、作業面の頭部が潰れ、打角が85度~100度と鈍角気味になっている。作業面の裏側からの打撃で打面部をとばした際の剥片である。打面再生剥片としたが、作業面からの加撃ではなく、打角の刷新に成功したかどうかは疑わしい。単に打面転移をした際の剥片かもしれない。右縁辺の全縁と左側縁の下部は折断により欠損している。所属時期は旧石器時代とは限らない。幅27mm、長さ24mm、厚さ9mm、質量4g。

3. 鋸歯縁搔器について

東海西部地域ⁱにおけるナイフ形石器文化終末期の石器組成は、小形のナイフ形石器とスクレイパーを主体とする。スクレイパーは2つのタイプに類型化でき、一つが



第3図 八百津町越水採集資料 (スクレイパー1・2、楔形石器3、打面再生剥片4)

既報告の拇指状搔器、もう一つが今回紹介した鋸齒縁搔器である(長屋 2006)。鋸齒縁搔器は、厚手の剥片の長軸の一端(縦長剥片であれば側縁、横長剥片であれば端部もしくは打面)に厚くて粗い急角度の調整を適当な間隔で加え、凸部が鋭く尖る鋸齒状の刃部を作り出す特徴的な形態である。

拇指状搔器は関東など東日本を中心に広く認められる形態であるのに対し、鋸齒縁搔器は東海西部地域に分布が濃く、西は大阪府八尾市の八尾南遺跡第2地点などでもみられる(原田・長屋ほか 1989)。岐阜県内では岐阜市寺田遺跡、椿洞遺跡、関市赤土坂遺跡、愛知県豊川市駒場遺跡、三重県大台町出張遺跡など、ナイフ形石器終末期の石器群には高い確率で伴っている。越水遺跡では従来報告されていなかったが、やはりこのタイプが伴うことが確認できた。鋸齒縁搔器は、当地域では時代を限定できる示準化石的な扱いも可能であろう。

4. 八百津町野上採集資料の詳細な採集地について

当資料に付されたメモによると、採集地は八百津町野上(坂下周辺)の道路わき。昭和49年5月25日、八百津中学校郷土史研究会のメンバー(メモには個人名が記載されている)が発見したとある。昭和51年5月5日(博物館の開館当初)に、郷土史研究会より寄贈を受けている。

八百津町野上は木曾川右岸の段丘面と、北側の山塊からの崖錘斜面が広がる地域である。山を深く刻み流れていた木曾川が濃尾平野に流れ出る地形的な境界にあたり、段丘面には造道、六ノ坪、坂下、厚朴、清水、権現堂、逆巻などの遺跡、崖錘斜面には東中長、湯田、栃木、宮後、ねきさし塚などの遺跡が覆い尽くすように分布している(第2図)。遺跡地図では、坂下遺跡が旧石器時代とされるほかは、全て縄文時代の遺跡として登録され(岐阜県教育委員会 1990)、町史では、木曾川右岸一帯には縄文時代前期以降の遺跡が多いとされている(八百津町史編纂委員会 1976)。

今回紹介する資料は下呂石の石核であるが、拳大より一回り大きなサイズで、メモには礫器と記されている。資料が採集された昭和40年代の終わりから50年代には、多治見市西坂遺跡のチャート岩が前期旧石器時代の礫器ではないかという議論があり、それを反映しているのであろう。当時は、こうした礫器が前期旧石器時代の所産であるかどうかは議論が分かれていたものの、礫器文化をナイフ形石器文化に先行する一つの段階として積極的に評価する流れにあったようである。当館の開館

時にも、そうした認識で展示が行われていた。

坂下周辺の道路わきというメモの記載から、国道418号線沿いにある坂下遺跡が採集地の候補としてあげられる。坂下遺跡が旧石器時代遺跡として登録されているのは、当資料を礫器文化の所産として評価したことによるのであろう。

5. 八百津町野上採集の下呂石製石核について

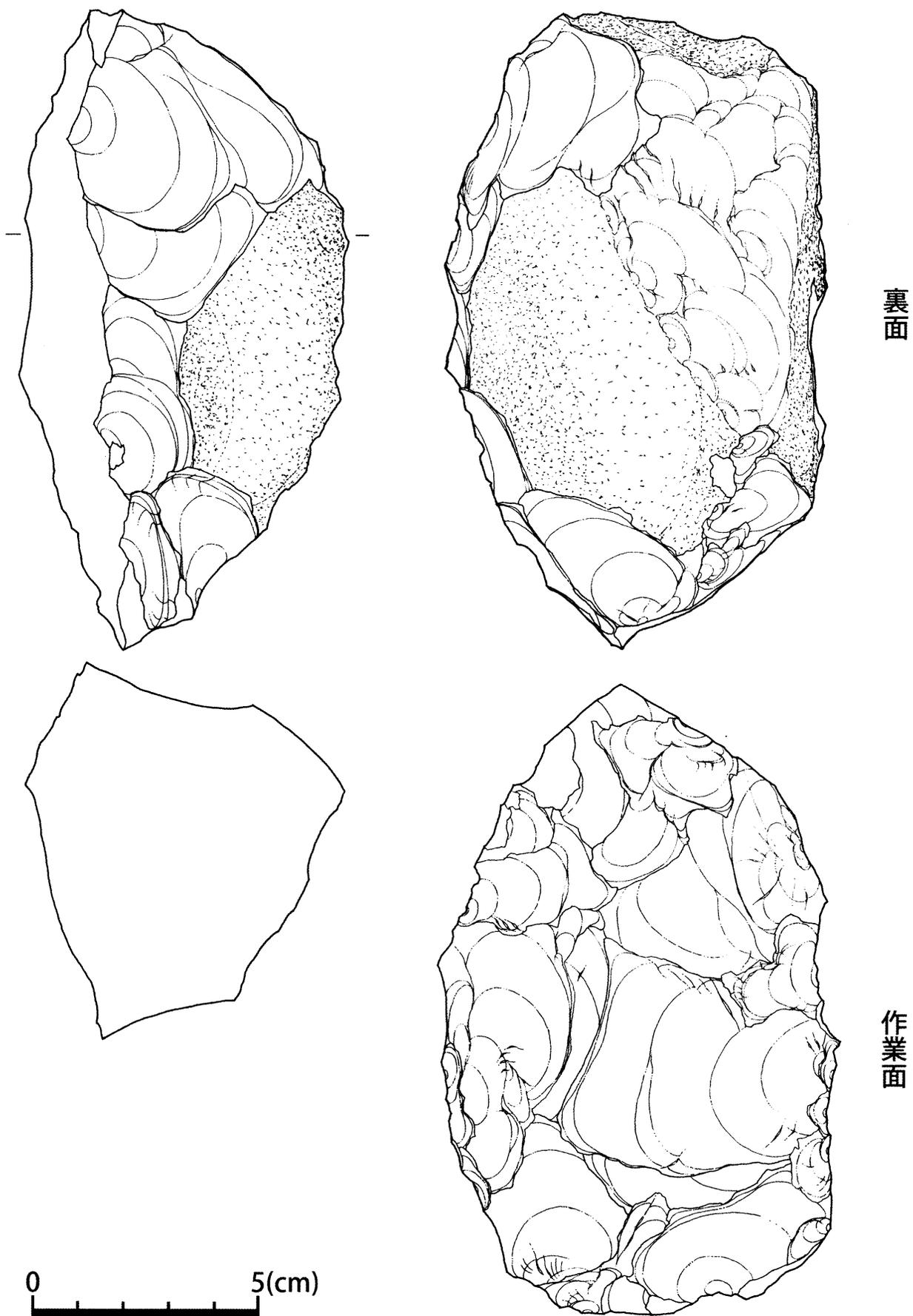
当資料は風化の浅い下呂石製で、裏面には平滑な礫面が大きく残る。素材は下呂市湯ヶ峰の下呂石露頭近隣で採集された塊状の角礫のようである。

礫器ではなく石核である。刃部作出ととらえられた加工は、剥片作出と打面調整の痕である。搬出資料については知られておらず、時期の特定はできない。ただし、越水遺跡の項で見たとおり、旧石器時代の八百津町界隈ではチャート岩の利用が卓越し、下呂石の利用は限られている。したがって、旧石器時代の所産とは言い切れず、縄文時代のものである可能性が高い。

礫の一面に作業面を設定し、周囲より剥離を行い、不定型な剥片を作出している。最大60mm×45mmほどの剥片が得られている。裏面の左側縁に施された数枚の剥離は打面調整であるが、山形の稜を作り出すことが目的ではないようである。剥片作出のための打撃は稜部・平坦部関係なく行われている。これはおそらく打角の調整が目的であろう。これにより、55度～75度の打角に揃えられている。裏面右側縁の礫面と作業面の打角も60度～70度である。

裏面中央の稜から右に広がる剥離面は、風化の度合いこそ他の剥離面と大差ないものの、自然為の衝撃による剥離痕であると認定した。その理由として、打角が110度から118度と鈍角であることとともに、複数のバルブが観察され、それぞれの打撃による剥離が完遂していないことがあげられる。鈍角剥離が自然為の証とならないことは実験等によって示されているが(長井 2010)、後期旧石器時代以降はあえて選択しない技術である。また、衝撃によるクラックは剥離が成立しなくても礫に残り、次の衝撃による剥離に影響を及ぼすことから、広い範囲に不成立の剥離を残すことは何らかの合理的な理由が必要となる。こうした視点は、自然為の剥離を区別する目安となるであろう。

長軸 139mm, 短軸 85mm, 厚さ 67mm, 質量 790g.



第4図 八百津町野上採集石核

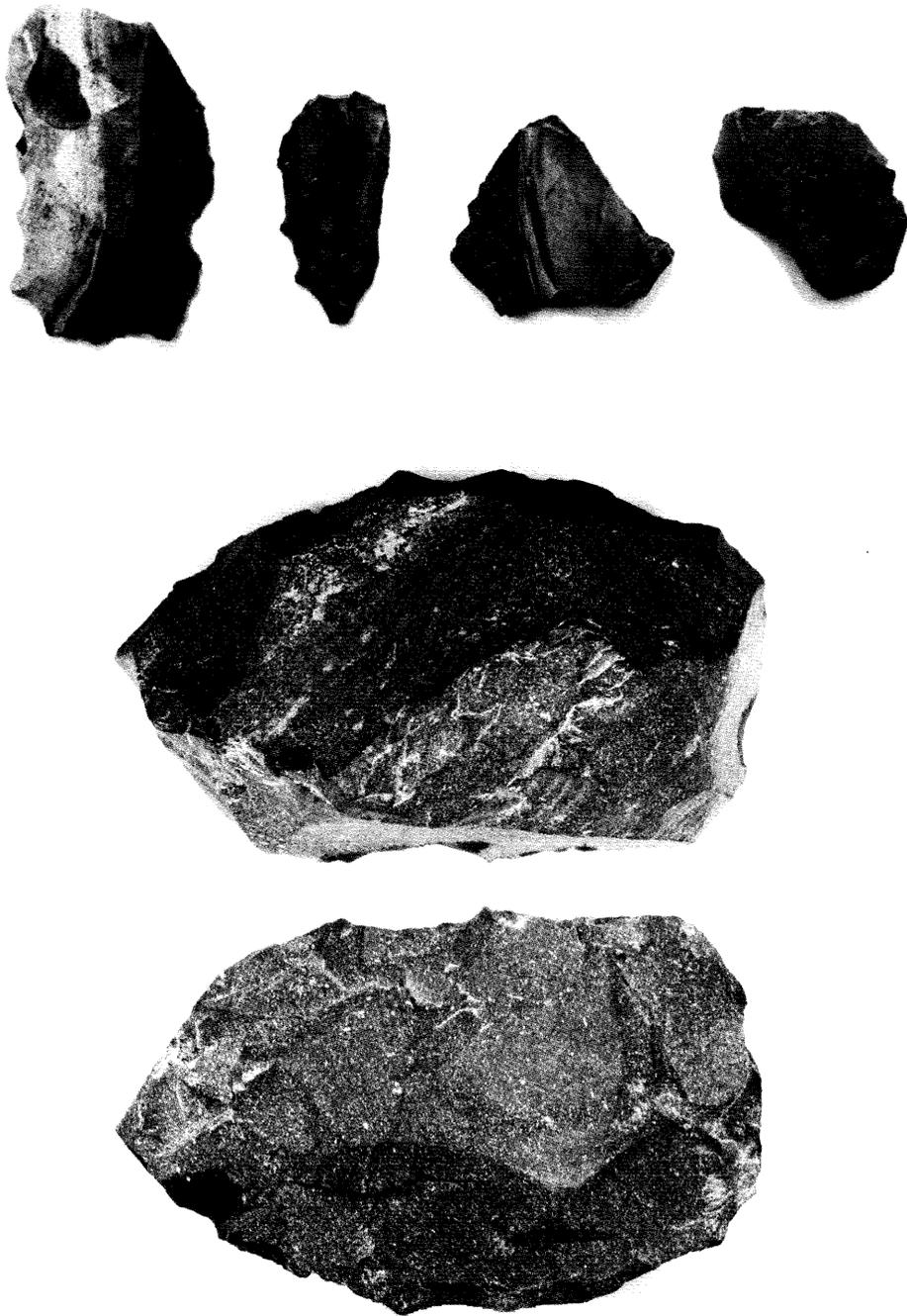
【引用・参考文献】

岐阜県教育委員会，1990，改訂版岐阜県遺跡地図
長屋幸二，2006，「東海地域西部と近畿地域のナイフ形
石器終末期」『石器文化研究』13
長井謙治「前期・中期旧石器時代の石器製作技術」『旧
石器時代研究の諸問題』日本旧石器学会
八百津町史編纂委員会，1976，第3章原始時代，八百津
町史通史編

原田昌則・長屋幸二・三原慎吾・松藤和人，1989，「八
尾南遺跡第2地点の旧石器」『旧石器考古学』38，旧石
器文化談話会

脚注

i 伊勢湾に流れ込む河川の流域は一つの地域的まとまり
としてとらえられる。現在の行政区画では，三重県・愛
知県と岐阜県美濃地域を主とする地域である。



第5図 八百津町越水遺跡採集石器（上段）、八百津町野上採集石核（下段）